平成 12 年度(2000)

個展を前提とした作品制作研究⒁

第14回個展・画廊沖縄　in　Naha

金城　満

１．展覧会名：

金城満展　−シリーズ「鉄の座標」−

２．趣旨：

様々な暴力。今世紀のそれは「鉄」か。次世紀、カタチを変え新たな座標を這うのか。「電子」が這う座標、・・・何を産むのか。

３．材料技法

厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

４．展覧会場

画廊沖縄

５．展覧会期

2000年09月22日（金）～30日（土）　、25日（月）は休み　※８日間

６．開館時間

11：00～19：00

７．観覧料金

無料

８．企画

画廊沖縄

９．作品リスト

No.	作　品　名	サイズ（ｃｍ）	材　　料	制作年月	備　考
200	シリーズ「鉄の記憶」01	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
201	シリーズ「鉄の記憶」02	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
202	シリーズ「鉄の記憶」03	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
203	シリーズ「鉄の記憶」04	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
204	シリーズ「鉄の記憶」05	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
205	シリーズ「鉄の記憶」06	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
206	シリーズ「鉄の記憶」07	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
207	シリーズ「鉄の記憶」08	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
208	シリーズ「鉄の記憶」09	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
209	シリーズ「鉄の記憶」10	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
210	シリーズ「鉄の記憶」11	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
211	シリーズ「鉄の記憶」12	60.0 x 30.0 cm	厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗り、ニカワ、顔料、油彩、箔、釘	2000年	第14回個展
212	シリーズ「鉄の記憶」13	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
213	シリーズ「鉄の記憶」14	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
214	シリーズ「鉄の記憶」15	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
215	シリーズ「鉄の記憶」16	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
216	シリーズ「鉄の記憶」17	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展

217	**シリーズ「鉄の記憶」18**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
218	**シリーズ「鉄の記憶」19**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
219	**シリーズ「鉄の記憶」20**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
220	**シリーズ「鉄の記憶」21**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
221	**シリーズ「鉄の記憶」22**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
222	**シリーズ「鉄の記憶」23**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展
223	**シリーズ「鉄の記憶」24**	27.0 x 12.0 cm	厚さ1.3cmの合板に和紙、アクリル、インク、水彩、箔、釘	2000年	第14回個展

10. 関連イベント

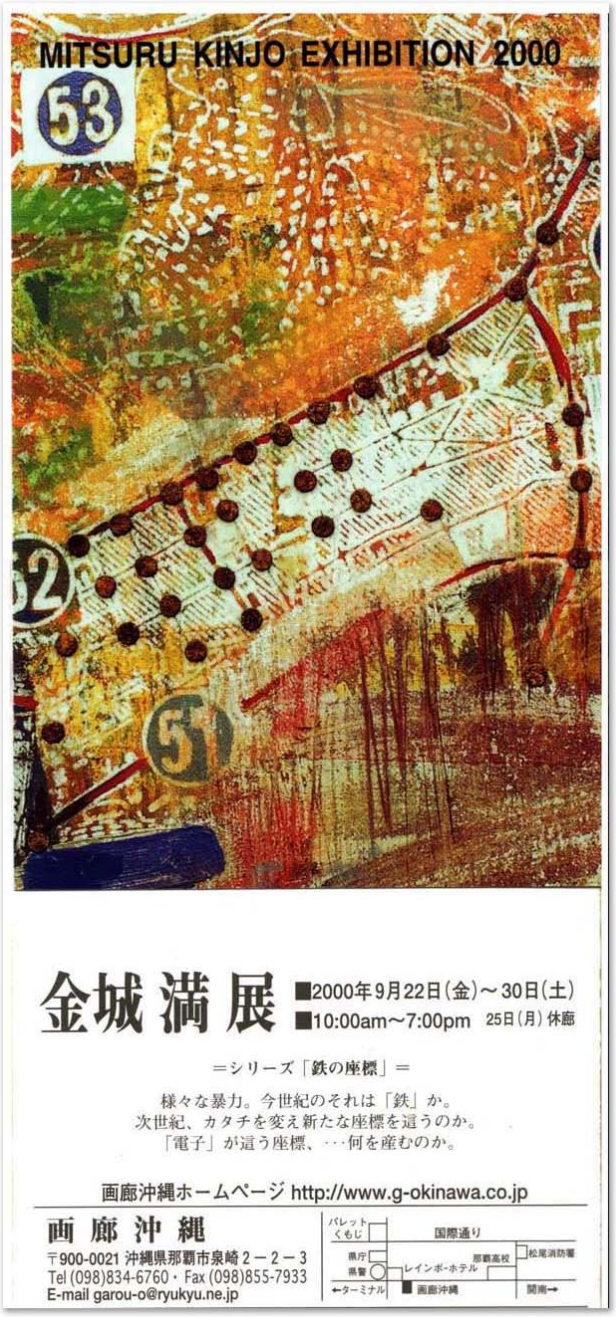
アーティスト・トーク

11. 考察（報道等資料）（pp.26-28）

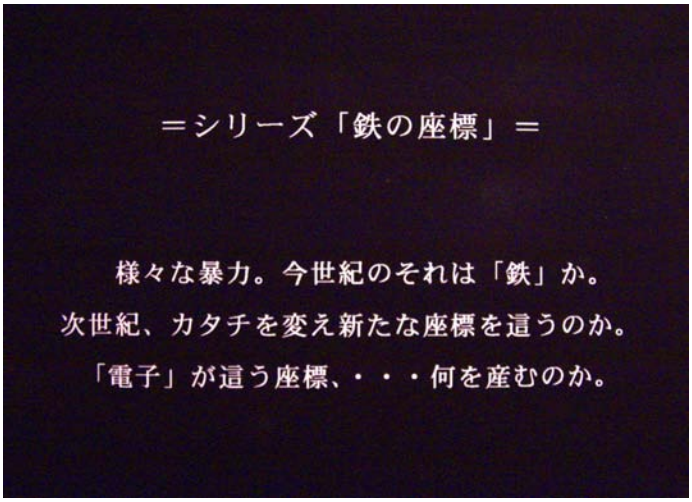
⑴沖縄タイムス 2000.09.27　展評/「鉄の釘」に沖縄の怨嗟と痛み
（グループ Z0 同人/山田　高）

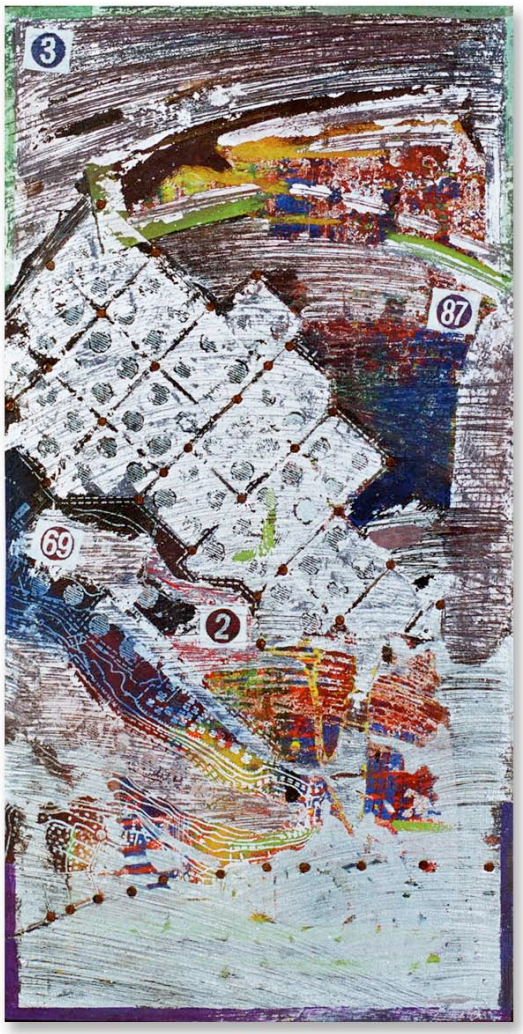
⑵琉球新報 2000.09.28　展評/金城満展　−シリーズ「鉄の座標」−
色彩家の面目躍如　（県文化振興課主査　翁長直樹）

⑶沖縄タイムス 2000.10.06　９月美術月評/シンザトヨシカズ


MITSURU KINJO EXHIBITION 2000
53
52
51
金城満展
■2000年9月22日(金)～30日(土)
■10:00am～7:00pm　25日(月)休廊
＝シリーズ「鉄の座標」＝
様々な暴力。今世紀のそれは「鉄」か。
次世紀、カタチを変え新たな座標を這うのか。
「電子」が這う座標、…何を産むのか。
画廊沖縄ホームページ http://www.g-okinawa.co.jp
画廊沖縄
〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎2－2－3
Tel (098)834-6760・Fax (098)855-7933
E-mail garou-o@ryukyu.ne.jp
パレットくもじ
国際通り
県庁
那覇高校
松尾消防署
県警
レインボーホテル
←ターミナル
画廊沖縄
関南→

金城 満 展
Mitsuru Kinjo Exhibition
2000.9/22 fri ～ 30sat
10:00am ～ 7:00pm


＝シリーズ「鉄の座標」＝
様々な暴力。今世紀のそれは「鉄」か。
次世紀、カタチを変え新たな座標を這うのか。
「電子」が這う座標、・・・何を産むのか。

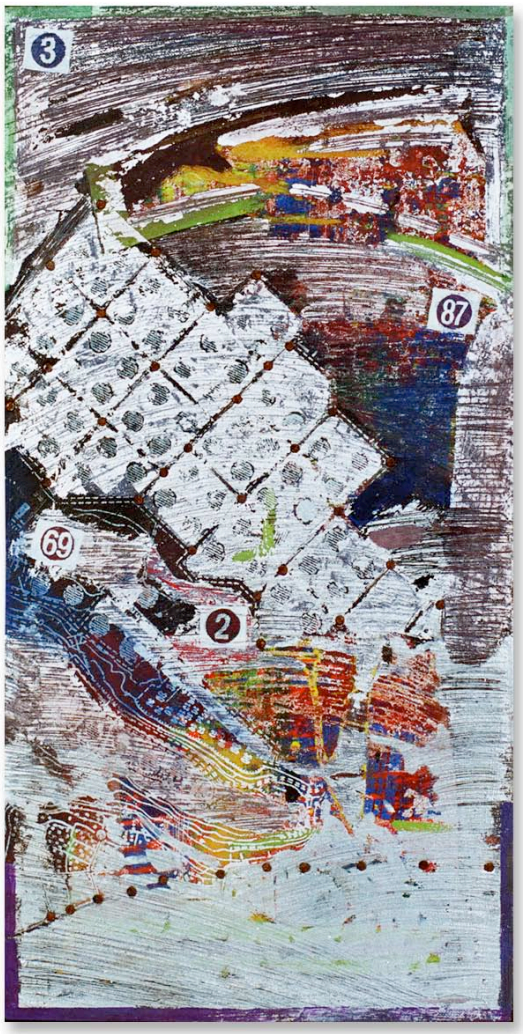


鉄の記憶03
60.0 x 30.0　　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶04
60.0 x 30.0　　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶01
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶02
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

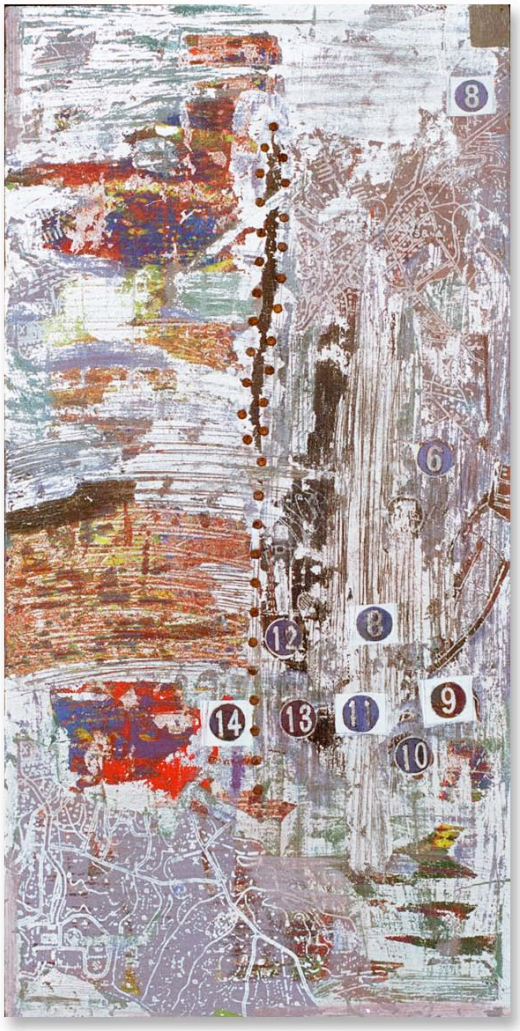


鉄の記憶03
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶04
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶05
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶06
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

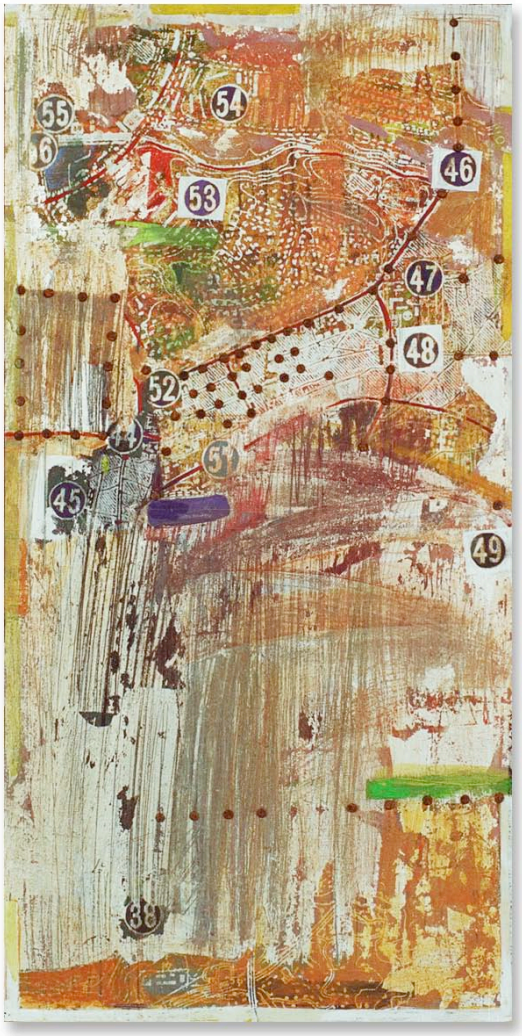


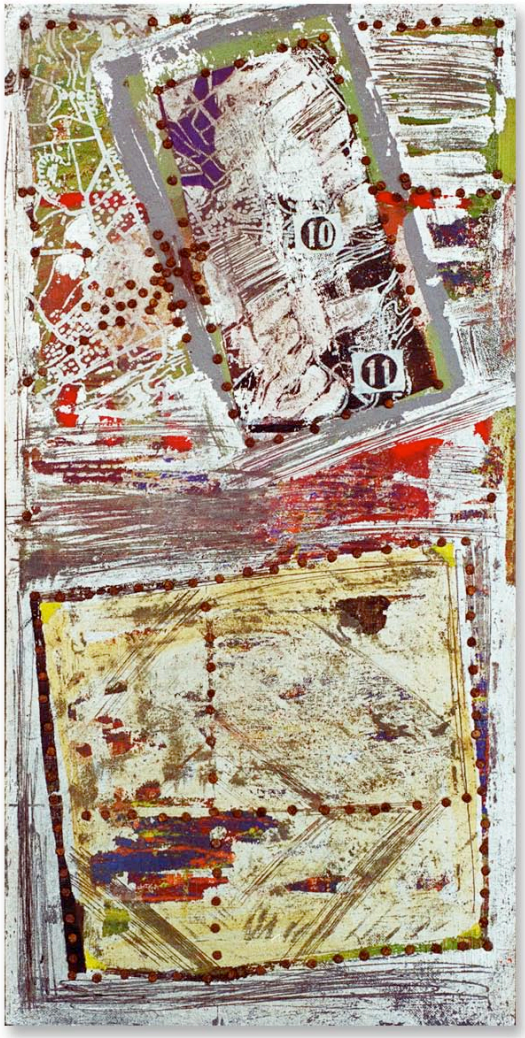
鉄の記憶07
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶08
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶09
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶10
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘





鉄の記憶11
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

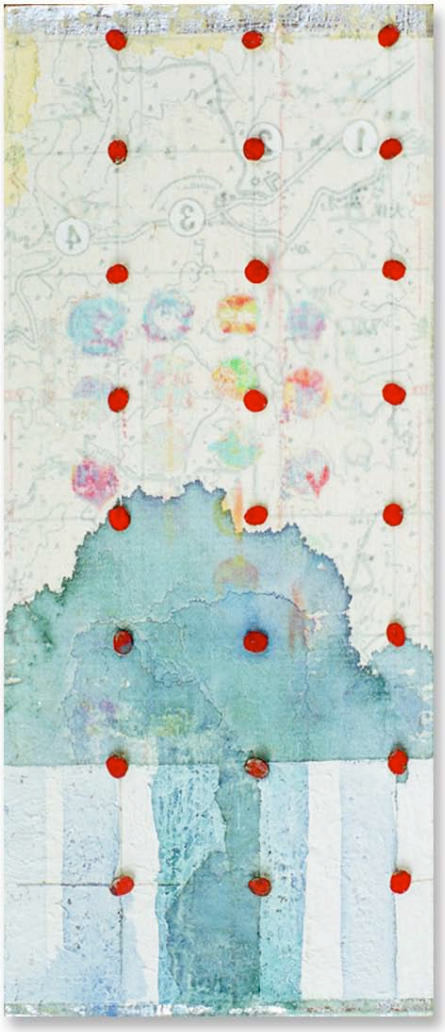
鉄の記憶12
60.0 x 30.0　2000年
厚さ6cmのパネルに綿布、石膏地塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶13
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶14
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

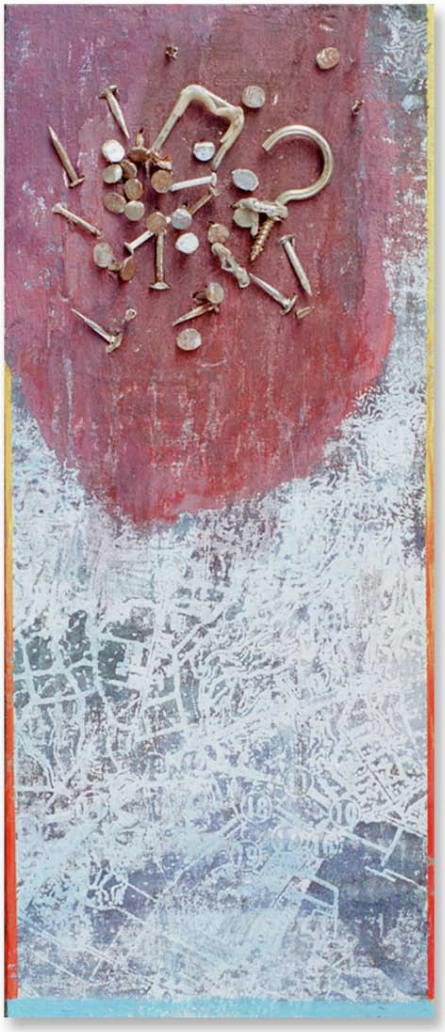
鉄の記憶15
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶16
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘



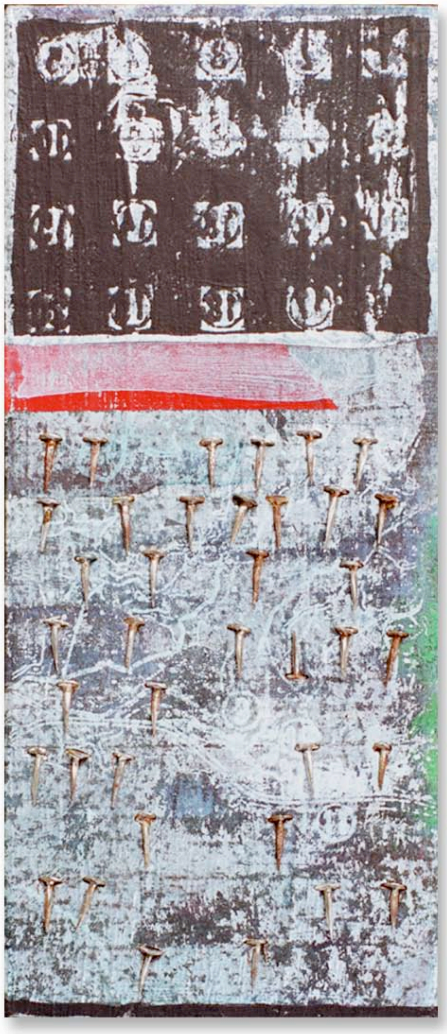
鉄の記憶17
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶18
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘



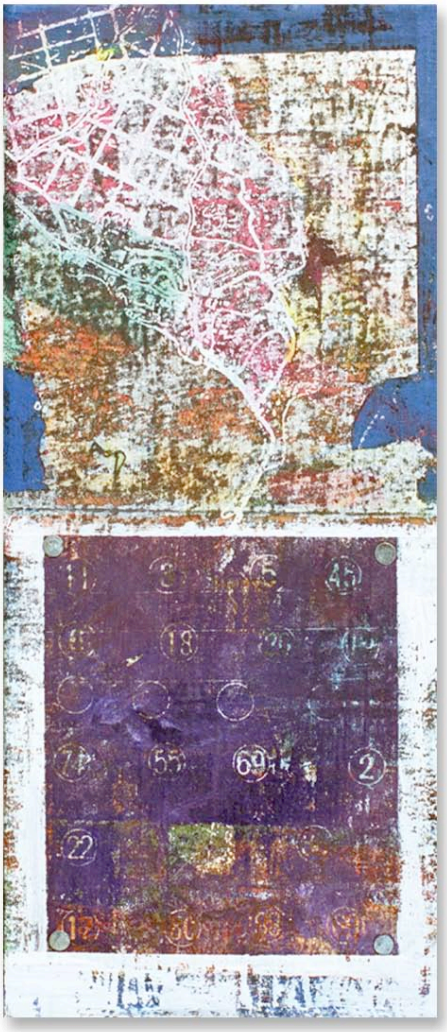
鉄の記憶19
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶20
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘



鉄の記憶21
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶22
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘



鉄の記憶23
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶24
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

鉄の記憶25
27.0 x 12.0cm　2000年
厚さ1.2cmのパネルに綿布、石膏地
塗りニカワ、顔料、油彩、箔、釘

展示のようす

ART GALLERY OKINAWA
画廊沖縄

2000/9/22〜30画廊沖縄
シリーズ「鉄の座標」へ

お忙しい中
御来展
いただき
有り難う
御ざいました。

金城満
mking@nirai.ne.jp

沖縄タイムス

平成12（2000）年09月27日

「鉄の釘」に沖縄の怨嗟と痛み

金城　満展

展評

「鉄の座標」と名づけられた金城満氏の個展が提示するものは、沖縄の状況―それは氏を取り巻く状況の投影であろうが―へのいら立ちと困難、そして浄（きよ）め（氏自身は「祈り」という）を表現しようとしてる点で、アート＝芸術たり得ている。沖縄の状況とそのことに対する氏の思い、それがわれわれにも共有しうる形で現れているのである。

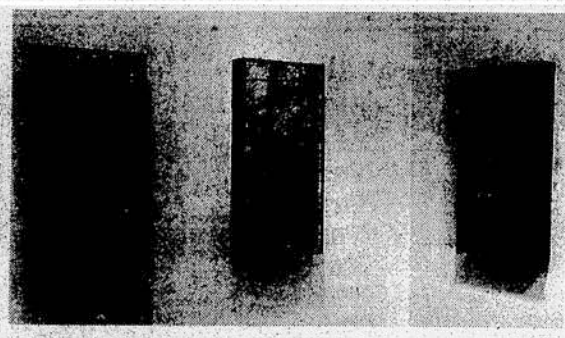
現在の沖縄の状況は、かつてのようにヤマトゥ対ウチナー、ウチナー対アメリカーのように、二項対立の構図では収まらず、それらの三すくみ、いや近隣アジアを含めると四すくみ以上の状況の観を呈している。最近はやりの言葉でいえば、ポストコロニアニズムとでも言うのだろうが、それを、氏は古代の文様を思わせる抽象化されたさまざまな図やパターン、あるいは数記号を赤褐色を基調とした色調で何層にも重ねることで、見るものを沖縄の歴史の地層へとスライドさせる。

二十点以上並んだ個々の小品は、一見、マチエールの調整と見える図や文様が、視点をずらすと、ナスカの地上絵のように沖縄の個々の地区の鳥観図のようだ。そうしてみると、それぞれに配置された数記号の意味を理解しやすくなる。それは、かつての民政府時代に名づけられた国道を表しているのではないだろうか。そして、すべての地区＝オブジェクトにアメリカ＝鉄の釘が打ち込まれていると言うことになろう。

しかし、この「鉄の釘（くぎ）」は、単にアメリカを象徴するものではなく、むしろそれぞれの沖縄への怨嗟（えんさ）と痛みの表現と考えた方がいいであろう。なぜならそれは、現在進行中の氏が「鉄の記憶」において試みているパフォーマンスを想起させるからだ。そこでは、木材へ金属を打ち込むという、本来異質なもの同士の貫入を自らの手で行うということで、異文化の接木という暴力の残酷さと同時にその痛みを共有しようとする試みをみれば、「鉄のくびき」を単純に考えることはできない。

とは言え、それぞれの地区＝オブジェクトが、整然と同一の矩形で、あたかも位牌（いはい）のように並んだ展示は、ともすれば噴出する個の情念（現在の沖縄の状況に対する怒り）を全体で抑制している。それが、氏の言う「祈り」であろう。単なる感情の表出となるのを、一歩手前で踏みとどまらせ、見るものを深い思念へと導き、ある種の美しさを漂わせているのもそうした展示方法によってである。（山田高男グループ「NO」）

◇金城満展は、那覇市泉崎の画廊沖縄で三十日まで。問い合わせは同画廊、電話098（834）6760。



金城満展「鉄の座標」

琉球新報
平成12（2000）年09月28日

展評

金城満展
シリーズ「鉄の座標」

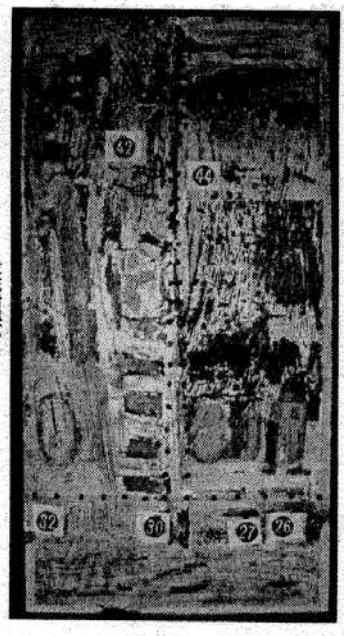
色彩家の面目躍如

翁長 直樹

金城満が五年ぶりの個展を開催している。

金城が沖展、県展で鮮烈デビューをして十数年がたった。あけみお展も入れると県内のほとんどの賞を総なめにし、個展も重ねたが、この数年はしばし沈黙していたかに見えた。

九〇年代に入ってコンピューターを使った作品づくりが目立つようになったが、大きな変化は、九六年のプロジェクト、「石の声」の社会的なメッセージ性の強い仕事にある。それは、実際のプロジェクトの遂行者は、おもに氏自身が教えている高校の生徒を中心とし、他に参加者を募り、小石の表面にマジックで数字を書き入れてもらい、沖縄戦の犠牲者の数約二十三万個を、佐喜真美術館の前庭に積み上げ、儀式を行うというものであった。それははじめて県内の作家によって、感動をもって受け入れられたパブリックアートとも言うべきプロジェクトであった。



金城満展から

これまで沖縄ではきわめて少数を除いて社会的現実をテーマにした作家はほとんどいなかった。はっきりいって、過去の沖縄において抽象画は起源を忘れたまま、その意匠に明け暮れた感もある。五〇年代土地闘争などの激しい政治の季節に、美術家はだれにも属さない、自立したモダニズムの美学を求める。しかしそれはあくまでメディアとしての自立であり、現実的な社会的態度まで判断停止ということではなかったはずである。実際は米軍基地内の施設で展覧会を開き、記念写真にも収まったりした。そこでは作品がどの場所でどこでだれに見られるかという視点が全く欠如していた。

九五年以降美術家に沖縄の歴史や現実を作品化する傾向が顕著に表れる。それはこれまでの狭いモダニズムの呪縛から解き放たれたという感覚や、社会状況が後押しした感がある。さらにこの時期海外から来沖したパブリックアートの作家が、講演をしたり、より政治的な刺のある壮大なプロジェクトを展開した（けっきょく挫折したが）。金城の大きな転換もおそらくその流れに位置付けられるものである。

さて、今展である。今回の作品はこれまでと同様混合技法であり、膠、油彩、シルクスクリーン、アルミ箔、釘が使用された平面である。画面はきわめて美しく色彩家としての面目躍如というべきか。金城は今回、これまでの作品づくりに一貫性をもたらそうとして、具象的な図像にたよらない、ある程度制御された平面を提示した。しかし、よく見るとシルクスクリーンで刷られた地図の上に釘の頭が整然と並び、それがまるで空爆の跡のように連想される。何層にも重ねた絵の具を剝ぎ取り、擦った表面にうがたれた数字は、極めて冷徹な悪魔の数字か。今展は、金城が現在進めているインターネットを使った、一般参加型のプロジェクト、「鉄の記憶」の平面シリーズとも位置付けられよう。

近年アジア美術に顕著に見られるように、社会の現実と向き合う作品が増えてきたが、社会的なテーマを打ち出す時、問題となるのは作品の質ではないかと考えている。美術作品としての強度と広がりこそがメッセージを支えるものである。

その意味では今回の金城作品は作品として成り立たしめることに成功したと思える。とはいえ、その作品たちは歴史のフィルターがかかって見え、美しすぎると思ったのは筆者だけであろうか。

（県文化振興課主査）

「金城満展」は三十日まで那覇市の画廊沖縄で。

沖縄タイムス

平成12（2000）年10月06日

理想を追求すれば食えなくなるという現実

美術月評〈9月〉

シンザト ヨシカズ

沖縄でもOPA前辺の路上で手作りのストラップや自分で描いたポストカードなどを売っている若者を見かける。以前は人目の少ない深夜に、閉店した店のシャッターの前で怪しい外人さんが指輪やネックレスを並べているのを見かけたが、最近では人通りの多い日曜日の昼間から路上で金髪の若者がわきにスケボーを置いてかっこよく商売していて、それが結構売れているらしい。一昔前に東京原宿の路上で億を稼いだグループもいるとかいないとか。

東京の路上で商売をしていたYさんは、埃（ほこり）まみれのリュックの中から、自分が書いたという本を一冊差し出した。髪はボサボサで飾り気がなく、ホームレスのように見えるのだが、早稲田で社会学を専攻したインテリである。学生時代から世界各地を放浪し、異民族国家に搾取され続けた少数民族の悲惨な極貧生活を体験しているうちに社会復帰できなくなったと彼は言い、路上で渡航費を稼いではアフリカに通い続けている。最近は仕入れた物を専門店に卸したり、コレクターのマダムがいたり、わざわざ路上に出なくてもさそうなものだが、あえて路上に出る。彼にとって路上の商売はお金のためだけではないのだ。

変化なく肩透かし　金城　満展

見ごたえある画業　永原達郎展

卓越したデッサン　真喜志勉展

和宇慶文夫イラストレーション展。照屋林助氏を描いた作品に和宇慶氏本人も顔を出している

金城満展。自作の間に立つ金城氏

渡名喜元俊「SKIN&BOX」展を開いた渡名喜元俊氏

真喜志勉個展会場

永原達郎自選展。自作の前に立つ永原氏

渡名喜元俊「SKIN&BOX」（那覇市民ギャラリー、十九―二十四日）をみる。案内状から木版のように見えるのだけれど発色が鮮やかで均一なのでおやっと思ったら、プリンターからの出力であった。沖縄芸能列伝のタイトルが示すとおり見たことのある顔がずらりと並んでいる。明るい発色とフラットな軽さが生きていて、あえてコンピューターにはない事をさせてないところにセンスを感じた。

和宇慶文夫展　明るい発色生きる

PLATFORM展　問題意識を作品化

渡名喜元俊展　針金素材に新鮮味

新鮮味は感じられなかった。しかし、現代美術のアーティストとして理想を追求すれば食えなくなるという現実もまた作家を弱くする。

その点、グラフィックデザインの仕事は明快である。和宇慶文夫イラストレーション展（那覇市民ギャラリー、十九―二十四日）をみる。五年ぶりの展示である。「ぬーそーたー」、十一月一日）をみる。「みんなこればっかり」が「みんなこればっかり言うやっさー」。相変わらずである。周囲の期待も大きいので五年ぶりという言葉が強調されるのだが、本人も絵は以前と変わらず、肩透かしを食らわされた。私としては、〈石の声〉のイベント以降の、そういうプロジェクトの遂行者としての仕事をもっと見せてほしかったのだが、平面は平面で成立を考えているらしい。しかし、物見氏が展評で書いていた「色彩家の面目躍如」という言い方には戸惑いを覚えるのだが、もっとストレートな表現の方がよかったのではと私も思う。

金城満展（画廊沖縄、二十二―三十日）をみる。五年ぶりの展示である。「ぬーそーたー」、十一月一日）をみる。「みんなこればっかり」が「みんなこればっかり言うやっさー」。相変わらずである。周囲の期待も大きいので五年ぶりという言葉が強調されるのだが、本人も絵は以前と変わらず、肩透かしを食らわされた。私としては、〈石の声〉のイベント以降の、そういうプロジェクトの遂行者としての仕事をもっと見せてほしかったのだが、平面は平面で成立を考えているらしい。しかし、物見氏が展評で書いていた「色彩家の面目躍如」という言い方には戸惑いを覚えるのだが、もっとストレートな表現の方がよかったのではと私も思う。

真喜志勉個展「BORN／OKINAWA／1941」（画廊サロンドミツ、二十六日―十月一日）をみる。20世紀フォックスのロゴマークが入った案内状が話題を呼んだ。いつも氏の作品を見て最初に、この人はデッサンのうまい人だなとつくづく感じる。真喜志氏の絵ではないのでなぜ感じがするかもしれないが、漆喰（しっくい）を何気なく指で引っかいた跡や、全体のボリュームやバランス、色彩がそう感じさせるのである。銃弾が付いてなくてもそれだけでも十分魅力的な平面なのである。

PLATFORM展（宜野座村立博物館、二十四日―十月八日）をみる。平井真人氏の布と菅里秀和氏・比嘉洋方氏・田中睦治氏の写真で構成された展覧会で、コラボレーションの作品と個々の作品を二部屋に分けて展示していた。そのほか、会期中に写真のワークショップを開催したりと、地域の人たちとの出会いを大事にすることで作家の問題意識を掘り起こし作品化していくという手法が面白かった。

永原達郎自選展（浦添市美術館、九―二十四日）をみる。氏の四十年にも及ぶ画業の展覧は見ごたえのあるものであった。抽象から具象への転換、世界と自分との距離の話が興味深かった。（造形作家）